

JRS
第73回日本医学放射線学会総会

JSRT
第70回日本放射線技術学会総会学術大会

JSMP
第107回日本医学物理学学会学術大会

ITEM
2014国際医用画像総合展

特集

JRC 2014

Face to Faces, Face to Communities, Face to the World

向きあう、つながる、そして広がる



「Face to Faces, Face to Communities, Face to the World —向きあう、つながる、そして広がる」をメインテーマに、4月10日（木）～13日（日）の4日間、パシフィコ横浜を会場にJRC2014が開催された。第73回日本医学放射線学会（JRS）総会の会長は金澤 右氏（岡山大学大学院），第70回日本放射線技術学会（JSRT）総会学術大会の大会長は江口陽一氏（山形大学医学部附属病院），第107回日本医学物理学学会（JSMP）学術大会の大会長は福士政広氏（首都大学東京大学院）が務めた。また、3学会に加え、2014国際医用画像総合展（ITEM in JRC 2014）も併催。4日間晴天に恵まれ、パシフィコ横浜は会議センター、展示ホールともに、多くの参加者で活気に満ちていた。



JRCにとって大きなテーマの1つが国際化であり、昨年も「世界」というキーワードがメインテーマに取り入れられ、今回も「Face to the World」がうたわれている。11日に行われた合同開会式において、JRC代表理事の杉村和朗氏（神戸大学大

学院）は、3学会と日本画像医療システム工業会（JIRA）が合同で開催する世界的にもユニークなJRCの歴史と成果を踏まえて、日本の放射線医学を世界に向けて発信していきたいと意気込みを語った。JRCの国際化は着々と進み、今年はスライドの英語化はもとより、口演の英語発表の割合も順調に増えている。海外からの参加者も増加していることから、JRCが国際交流の場になりつつあることを実感できる4日間だった。

一方、わが国の医療に目を向ければ、超高齢社会の中で、限られた医療資源を有効に活用するために医療機関の機能分化と連携を図り、地域包括ケアや地域医療連携の取り組みが進んでいる。また、多忙な医療現場で医療者の負担を軽減し効率的に医療を提供するために、チーム医療、多職種連携がますます重要になっている。こうした日本の医療の現状も、今回のメインテーマに盛り込まれている。JRC開催に当たり、金澤JRS会長は、人と人との交流や地域・世界とのつながりの重要性を理解し、医療本来の意義を再確認する場となることをめざし、メインテーマを考えたという。また、江口JSRT



杉村和朗・JRC代表理事



金澤 右・JRS会長



江口陽一・JSRT大会長



福士政広・JSMP大会長



小松研一・JIRA会長

大会長は、患者や周囲の医療スタッフと向き合い、互いにリスペクトしてチーム医療を進め、日本の医療に貢献するという思いを込めたとしている。

このメインテーマに込められた思いを形にしたものの1つが、展示ホールのITEM会場内に設けられた「チーム医療・リスペクトコーナー」である。2014年は4年に1回のサッカーワールドカップがブラジルで開催されるが、今回、JRCでは日本サッカー協会（JFA）とコラボレーション。JFAが進めるリスペクトプロジェクト「大切に思うこと」の理念がチーム医療にも通じることから、チーム医療を推進している施設のパネルなどを展示してアピールした。

JFAとのコラボレーションとしては、13日にも合同シンポジウム3が設けられた。JRC-JFA ジョイントシンポジウム「つながる人材育成とスペシャリスト養成」では、司会を大阪府立急性期・総合医療センターの船橋正夫氏と、JFA理事でワールドカップなど国際試合での審判経験も豊富な上川 徹氏が務めた。放射線科専門医の立場から角谷真澄氏（信州大学）が、診療放射線技師の立場から土井 司氏（大阪大学医学部附属病院）が、医学物理士の立場から榮 武二氏（筑波大学）が、サッカー指導者の立場から綾部美知枝氏（JFA）がそれぞれ、人材育成についての考え方を講演した。



このほかの合同シンポジウムとしては、12日に、合同シンポジウム1「より安全で確実なIVRを目指して」がメインホールにて開催され、IVRを安全に実施するための取り組みや支援ツールの開発などについての発表が行われた。司会はJRS理事長の栗林幸夫氏（慶應義塾大学）と江口JSRT大会長が務め、横山博典氏（国立循環器病研究センター）がIVRの被ばくの実態について講演し、平木隆夫氏（岡山大学）はCTガイド



ITEM会場内の「チーム医療・リスペクトコーナー」

下穿刺ロボットの開発について解説した。さらに、浅井望美氏（国立がん研究センター中央病院）が看護師の立場から安全なIVRを行う患者ケア、森安史典氏（東京医科大学）が超音波ガイド下穿刺による局所療法、村上卓道氏（近畿大学）がコーンビームCTによるIVR支援機能について講演した。

同じ日に行われた合同シンポジウム2は、福士JSMP大会長が司会を務め、「医療被ばくの低減と正当化、最適化のバランス」をテーマに行われた。まず、宮崎 治氏（国立成育医療研究センター）が小児放射線専門医の立場から小児CTにおける正当化と最適化について発表したほか、鈴木昇一氏（藤田保健衛生大学）は、CT検査で患者が受ける線量の現状と低減化について説明。さらに島田義也氏（放射線医学総合研究所）は、低線量放射線の発がんリスクに関するエビデンスを解説し、赤羽恵一氏（放射線医学総合研究所）は、適切な正当化・最適化に向けた取り組みをテーマに発表した。

また、11日は合同開会式に続き、メインホールで合同特別講演「iPS細胞研究の現状と展望」が行われた。演者は京都大学再生医科学研究所/京都大学iPS細胞研究所の戸口田淳也氏。戸口田氏は、iPS細胞の研究で2012年のノーベル医学・



合同開会式での首都大学東京管弦楽団の演奏



ITEM2014開会式でのテープカット



Honorary Member Awarding Ceremony (JRS)



国立大ホール・マリンロビーのCyPos会場



JSRTの学生選抜研究発表の表彰

生理学賞を受賞した山中伸弥氏が所長を務める京都大学iPS細胞研究所の副所長で、増殖分化機構研究部門の主任研究者という要職にある。講演では、同研究所における10年間の達成目標である、基盤技術の確立・知財確保、再生医療用iPS細胞ストック構築、前臨床試験から臨床試験へ（パーキンソン病、糖尿病など）、患者由来iPS細胞による治療薬開発（難病、希少疾患など）の4つのテーマについて、現状と展望を紹介した。



JRC 2014では、ほかにもユニークな企画として、JRSの特別企画2「行列のできる医療法律相談所」が行われた。これは人気テレビ番組になぞらえて、放射線科医が日常診療で遭遇する出来事について、法律上の解釈などを紹介するもの。アナウンサーの松本志のぶ氏が司会を務め、弁護士の北村晴男氏が解説、杉村JRC代表理事、金澤JRS会長が回答者として参加し、会場と一体となった楽しいセッションとなった。

さらに、今回は、研修医セミナーでアンサーパッドが導入され、セミナー中に回答を集計してスクリーンに表示するなど

して、双方向のやりとりを行う工夫が凝らされていた。

これら以外にも、12日朝には、JRSの「チャリティイベント Run & Walk」が開催され、117人の参加者が、オリンピックメダリストの有森裕子氏とともに、みなとみらい地区をランニングやウォーキングでめぐった。



今回の各学会の演題数は、JRSが口演400題、展示269題、JSRTが口演453題、展示216題、JSMPが口演185題であった。このうちJRSでは、口演の30%が英語で行われ、国際化が進んでいることを裏付ける数字となった。また、参加者数はJRSが5047人、JSRTが4709人、JSMPが909人、非会員が1158人で、総数は1万1823名であった。一方、11日から13日の3日間に開催されたITEM2014は、過去最多となる163社が出展。総展示面積も8816m²と、最も広い会場となった。これに伴い来場者数も昨年を上回り、2万2140人を記録した。



次回のJRC 2015は、2015年4月16日（木）～19日（日）の4日間、パシフィコ横浜を会場に開催される（ITEM2015は17日～19日の3日間）。メインテーマは、「Be Cool and Practical」。第74回JRS総会会長は大友 邦氏（東京大学大学院）、第71回JSRT総会学術大会大会長は平野浩志氏（信州大学医学部附属病院）、第109回JSMP学術大会大会長は和田真一氏（新潟大学）が務める。

インナビネットの「スペシャルレポート」公開中！
<http://www.innervision.co.jp/report/item/2014>

*「特集JRC 2014」内の所属は開催当時のものです。



合同閉会式前に演奏を行ったJRC2014 Festival Orchestra



合同閉会式前のCyPos表彰式（詳細はインナビネット参照）



JRC2015の会長・大会長も参加した合同閉会式